

ベラルーシの林檎

七十八歳だという長老格のおばあさんが、陽気な仕種で、合財袋から大事そうに、ひどく不器量でしなびたリンゴを取り出し、くるくると回しながら、スプーンで掘るようにして、
「ロシア式食べ方よ」

と伝授してくれる。

「ナイフで皮をむいてはダメよ。

栄養が逃げてしまうわ」



1996年5月
ミンスクにて

ほんとうに薄紙ほどの皮を残して、小さなリンゴを半分だけ食べ、残りをその薄皮で蓋をするように包み、また大事そうに合財袋の底にしまった。

このおばあさんが、日本の高級青果店に並ぶ、色よく、大きく、うつくしく、ピカピカ光って、フジとかスターキングとか立派な名前までつけられ、尊大な容姿で鎮座している物体が、スプーンで削りとられた皮蓋でくるまれ、なお、膝の上の袋の中で愛しまれている自分のリンゴと同じ種族の食品と知ったら、びっくりするにちがいない。

岸恵子『ベラルーシの林檎(1993)』